

男子ハンドボール

秋季リーグ

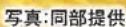


今回の勝因としては、「筑波型ディフェンスの完成度が高いこと」が大きいようだ。また、「底することや、代表選手の部員が自信をつけて派遣先から帰ってくる」ことが、チームに好



牧野イサム

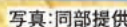
このイタビユートの翌日には、高松宮記念杯男子61回全日本学生選手権大会(全日本インカレ)に向けて出発する男子ハンドボール部。出発前の意気込みを、森永選手は「練習の雰囲気をおのまゝ会場に持って行つて、筑波大の雰囲気では会場を染めたい」と話した。今大会が4年生にとつては学生最後のインカレだ。これまで1年間、主将を務めてきた牧野選手は、チームビルディングを大切にしてきた。なぜこの動きをするのかを考えながら、常に意図をもってプレーす



で勝つ。く、ハルを楽しんで
 気持ち良く勝つ。部員にはそ
 れぞれの楽しみ方で楽しんで
 ほしい。」と語った。この想いは、
 自らの姿を通じてチームに伝
 わっていることだろう。

(島田すみれ)

バドミントン部
男女でインカレ表彰台



**女子団体
史上初の5連覇**

もりでい。」と話した。周
りからの大きな期待やプレッ
シャーの中で、日々の自身の
努力を信じ、5連覇達成と
いう強い思いを胸に大会に臨
んだようだ。

団体戦決勝のダルスにて、
龍谷大学との対戦では接戦
が繰り広げられていた。団体
戦でペアを組んだお二人にこ
のときの心境について尋ねる
と、安田選手は「ペア(香山
選手)とは『思い切り』『ス
ピード』を意識し合った。強
気で攻め、緊張よりも勝気
のほうが強かった。」と話し
た。一方で香山選手は「途中、
一気に点を追いつかれた際は
『ここで連覇が終わるのかな』
と、うう不安も過つたが、
二人で点ずつ決めた。」と話
し、緊迫した状況の中で、い
かに気持ち落ち着かせ試
合に挑んだのか伺えた。

個人戦のシケルスの優勝
について、香山選手は「優勝
は絶対条件であり、力まず
焦らぬよう、目の前の試合で
最高のパフォーマンスを発揮し
よう、という思いで臨んだ。」

と振り返る。去年一年間
多くの人のリップを見て研習
し、グリップの持ち方やフー
ム、サップ等を変えたという
しかしその定着には時間が
かかり、思うようにいかな
時期もあつたようだ。それで
も苦闘したその二年間があ
なからこそ、今回の優勝に
ながつたのだろう。

今後の抱負について、安田
選手は「キヤプテンを二年間
務め、今後は後輩につなぐ
責任がある。これまでやって
良かつたことが思えるよう
に、後輩の力になれるよう
尽くしたい。全日本総合で
はベスト8入りを果たした
手は「全日本総合でベスト8
入り」を果たし、B代表(若手
中心の日本代表)に入りた
い。」と語る。また、香山選
手は「常に高い意識
を持ち、日々の練習に励む
彼女たちの強さは圧倒的
れる。様々な苦難に立ち向
かい、共に励まし合いたい
突き進むバドミントン部の姿
から、今後も目を離せない。」

(菊田文香)

編集後記

今回も筑波大学の体育会会が大活躍してたね。たぐささんの運動部が素晴らしい成績を残しており、我々編集部のどの部を取り上げるべきか毎回とても悩まされました。今回は一面で硬式野球部を取り上げましたが、他の面で取り上げた運動部も硬式野球部に勝るとも劣らない成績を残しています。だからこそ、私は一面だけでなくどの面も読んでほしいと思います。

さて、今号では嬉しい本紙に自分に関する記事を書いてほしいという依頼があったことです。その記事は3面にデフサッカーの特集という形で掲載されています。私の活動をサポートすることができると、私はうれしく思います。

再来年にはいよいよ東京オリンピックが開かれます。筑波大学の体育会の現役選手中、OB・OGの選手に世

と振りかぶる。去年一年間、多くの人のプレーを見て研究し、クリップの持ち方やフー、サパー等を変えたという。しかしその定着には時間がかかり、思うようにいかない時期もあったようだ。それでも苦闘したその二年間があったからこそ、今回の優勝につながったのだろう。

今後の抱負について、安田選手は「キャプテンを一年間務め、今後は後輩につなぐ責任がある。ここでやっけて良かった」と皆が思えるように、後輩の力になれるように尽くしたい。全日本総合ではベスト8入りを果たしたい」と語る。また、香山選手は「全日本総合でベスト8入りを果たし、B代表(若手中心の日本代表)に入りたい。」と語る。常に高い意識を持ち、日々の練習に励む彼女たちの強さには圧倒される。様々な苦難に立ち向かい、共に励まし合いたいから、今後も目を離せない。

(菊田文香)



第21回
リリースコラム

初めまして。今回コラムを担当させていただく西村です。締め切りが過ぎてしまったので、猛省しながらこの文章を書いています。早く提出します。書くといへば、私は手帳になんでも書き込みます。予定はもうろんのこと、疑問に思ったこと、出会った言葉や詩、買い物メモなど手当たり次第に書き込んでいきます。見返してみると、どこにないが書いてあるのかわかりにくいのですが、それも含めて楽しんでます。一番好きなページは、「今年やりたいことリスト」です。以前SNSでみて、今年から始めました。11月15日現在、81個中18個達成という何とも情けない状況ですが、リストを見返すと自分の好きなことばかりなのでワクワクします。皆さんもぜひやってみてください。やらないうてないことではなくやりたいことを書くのがおすすめです。私は2年生の4月から編集部に入部しました。その時の手帳には4月11日に「18・30」筑波スポーツ新聞「新歓行くぞ」とありましたが、この時は迷っていたようです。半年の間で記事にできたのは少ないですが、たくさんの部活を取り上げたいです。自分という部活がありましてほしいという部活に連絡ください！

次は編集員3年、
菊田文香さんです。

発行所/筑波大学体育会
(TEL.029-853-2589)
発行人/神田敬邦
編集/筑波スポーツ編集部
tsukusupo@hotmail.co.jp
責任者/松本樹

菊田文香(図情3年)
 会計
 蓮沼礼子(看護2年)
 編集スタッフ
 篠原美奈巳(比文4年)
 佐瀬醇(資源4年)
 千葉蓮(図情4年)
 山中貴裕(医療科4年)
 島田すみれ(比文3年)
 外本暖菜(図情2年)
 西村生(体育2年)
 篠崎陽介(図情1年)

そのために、春に筑波大学体育会の選手のみなさんのさらなる躍進を期待しています。

(篠崎陽介)

編集長
松本樹(比文2年)

界の大舞台で輝く姿を私は見たいです。そして、われわれ編集部もオリンピックに出場した選手たちを取り上げられたらうれしいです。

再来年にはいよいよ東京オリンピックが開かれます。筑波大学の体育会の現役選手や、OB・OGの選手に世

集という形で掲載されています。このように、本紙を通じて個人の活動をサポートすることができるとを、

とがありました。それは本紙に自分に関する記事を書いてほしいという依頼があったことです。その記事は3面ニデフナツカ目的の

ない成績を残しています。だからこそ、私は1面だけでなくどの面も読んでほしいと思います。

さて、今号では嬉しいこ

す。今回は上面で硬式野球部を取り上げましたが、他の面でも取り上げた運動部も硬式野球部に勝るとも劣ら

が大活躍でしたね。たくさん
の運動部が素晴らしい成
績を残しており、我々編集
部はどの部を取り上げるべ
きか毎号とても悩まされて

編集後記

編集後記

陸上競技部 奮闘奮闘



写真:同部提供

箱根駅伝予選会 本選出場逃す

第95回東京箱根間往復大学駅伝競走予選会が、10月13日(土)に東京都立川市で行われた。予選会では陸上自衛隊立川駐屯地をスタートし、立川市街地を回って国営昭和記念公園に帰って来る合計約21kmのコースを走る。各校上位10名の合計タイムを基に、11校が箱根本選への切符をつかむ狭き門である。この門を通過するため、筑波大学では、平成27年の4月から箱根駅伝復活プロジェクトと題して箱根への挑戦が本格始動した。4年目を迎える今年、筑波大学は総合タイムが10時間55分23秒という、出場38校中17位という結果に終わった。

今回は、関東学連のメンバーに選ばれた相馬崇史選手(体育2年、長野・佐久長型)と、新体制で主将を務める。そんな中、国立大学で

ある筑波大学の強みを、練習はもろもろ個人の目標に向かっている。予選会では、箱根駅伝の予選会を突破するためのモチベーションにしたいと話してくれた。また、チームを引っ張っていく新主将としての意気込みを池田選手に何うと、個人的には、筑波大学に貢献できない3年間であったので、関東インカレやインカレに出場し、入賞してチームに貢献したいと言った。また、筑波大学の長距離は強いというのを他の大学に周知させたいと話してくれた。チームとして箱根駅伝への前哨戦として、全日本大学駅伝の予選を突破したいと話した。さらにチームメンバーには、大切にしたいこととして、やらされるのではなく自分で考えること、また、高い目標を持ち、それに即した生活・練習をして目標を達成すること、個人で考えられる人たちの集まりはよい集団を作るとも言ってくれた。

相馬崇史



写真:西村撮影

インカレ総合部門 女子優勝・男子3位



写真:同部提供

9月6日より第87回日本陸上競技対校選手権大会(日本インカレ)が神奈川県・川崎市等々力競技場にて開催された。4日間わたる熱戦の末、女子は4年ぶりの総合優勝、男子も予想外の高得点を叩き出した。総合得点で3位につけるなど、好成績をおさめた。

筑波大学は二日から勢いに乗った。女子棒高跳で若園西選手(体育4年、岐阜・県立岐阜商業高)が2位入賞を果たしたのを皮切りに、5日に行われた関東インカレの女子1万メートルで自己ベストを更新し波に乗る上田雪菜選手(体育3年、奈良・奈良育英高)が、先頭集団に粘り強くついて3位に入賞し、前回大会の23位から順位を伸ばした。また、女子円盤投で2位と5位に入賞するなど、女子選手の活躍が光った。

二日目は筑波大学の勢いは止まらない。盛り上がりを見せたのは男子1500メートル決勝。才記社人選手(人間総合科学部)が筑波大学勢初優勝を生み出した。前大会に比べて6回目の試技に逆転され、1センチメートル差で2位に終わった。最終的に、2位に入賞。最終日に向けて弾みをつけた。

三日目には、女子三段跳で銀メダルを獲得した。女子三段跳選手権大会で2位に入賞した桑添友花選手(体育2年、宮城・古川黎明高)が出場。前大会優勝者で、20日の日本記録を持つ北口選手(日本大学)には及ばなかったが、2位に入賞。最終日に向けて弾みをつけた。

江原宇宙

写真:同部提供

走者を支える

陸上競技部は部員数約250人。筑波大学の中でも人数が多い部活の一つである。今回はそんな陸上競技部の主事(2018年11月現在)を務める岸井貴春さん(体育4年、神奈川県・横浜翠嵐高)にお話を伺い、陸上部の裏側に迫った。

陸上競技部は部員全員が競技を行い、運営にも参加している。

競技と、両立で悩むことも多い。陸上競技部は、活動の中心は練習である。練習以外の活動も深く考えることができる。岸井さん自身、主事を務めたことで、今までにはない視点で部を見ることができたという。



部を運営する委員会は5つあり、それぞれの主事の仕事は、それぞれ異なる。その中でも、広報委員会(Twitter)は、陸上競技部の魅力を伝える役割を担っている。岸井さんは、陸上競技部の魅力を伝えるために、Twitterで部員たちの活躍を報告している。また、部員たちの練習風景や、部活動の魅力を伝えるための写真や動画を撮影している。岸井さんは、陸上競技部の魅力を伝えるために、Twitterで部員たちの活躍を報告している。また、部員たちの練習風景や、部活動の魅力を伝えるための写真や動画を撮影している。

